

沖縄戦と平和ガイドに関する聞き取り記録

宮城 修

Interview records regarding the Battle of Okinawa and the Peace Guide

Osamu MIYAGI

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第17号別刷

2024年3月15日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.17

March, 2024

沖縄戦と平和ガイドに関する聞き取り記録

宮城 修¹⁾

Interview records regarding the Battle of Okinawa and the Peace Guide

Osamu MIYAGI¹⁾

1. はじめに

1945年に終結した沖縄戦。2025年には戦後80年となり大きな節目を迎える。これまでも、戦争を体験した方が少なくなってきたとさげばれているが、80年という年月の経過がますます戦争体験を直に聞くことを難しくさせている。今後、確実に戦争体験者がいなくなってしまうという現実味が強くなってきた。戦後、多くの人々により戦争体験が語られ、それが県史や各市町村史・字史(誌)、書籍、新聞等の多くの媒体に記録されてきた。そして、この一人ひとりの膨大な証言により沖縄戦の実相が明らかになってきた。今後は、その戦争体験者の証言を記録として残す作業自体も困難になることが目に見えて明らかである。本調査は、二人の戦争体験者から戦時中や戦後、そして戦争体験を語り継ぐ活動について聞き取りを実施した。両氏は県内の公立中学校の教諭を長年務め、定年退職後は沖縄市平和ガイドネットワークに所属し、県内外の児童・生徒や教職員、一般向けに平和教育を行ってきた照屋盛行氏(昭和15年生まれ、沖縄市平和ガイドネットワーク顧問)と森根昇氏(昭和16年生まれ、同ネットワーク共同代表世話人)である。沖縄市平和ガイドネットワークは、「基地や戦跡そして沖縄の歴史・自然等を学習する中から自らの知識を高めるとともに、沖縄市平和ガイドとして沖縄市及び沖縄県の基地や戦跡の案内人としての役割及び会活動等の役割を担うこと」を目的としている。会員数は近年30名前後を推移しており、記録で確認ができる2004年から17年間で、県内の小中高校の児童・生徒や教職員研修を中心に延べ552件(団体)、103,835

名を対象にフィールドワークや講話を実施している。同ネットワークが設立されたのは2001年頃と思われる。現時点で断定ができない理由としては、設立時期について両氏に伺ったところ曖昧さがあったためである。しかし、沖縄市の広報誌『広報おきなわ』(2001年6月号)では、会員募集のお知らせ(問い合わせ先:沖縄市平和・男女共同課)が初めて掲載され、また同ネットワークの規約が2001年2月13日施行となっている事から、会の設立準備期間を経て2001年までには設立したとみていいと考える。設立時期の確認については、今後の課題としたい。2002年と2003年には、沖縄市が毎年8月1日から9月7日までの間に実施する「平和月間プログラム」の一環で活動展を開き、また、同市の平和大使を対象としたフィールドワークのガイドとして活動を展開してきた。2005年からは同会の利用者が年間で数千人規模となり、活動が本格化してきたことがうかがえる。

沖縄戦の語り部は高齢化が進み、80年の月日の経過が風化を進めている。しかし、糸満市摩文仁の平和祈念公園内にある「平和の礎」に刻銘された242,046名(令和5(2023)年6月23日時点)の方と未だ刻銘されていない方々の犠牲を無駄にすることなく、沖縄戦の教訓と平和の尊さの理念を後世に継承していくは重要だと考える。「戦争体験を風化させてはならない」。これは今を生きる世代の責務だと認識する。

2. 森根昇氏からの聞き取り内容

森根氏はうるま市与那城屋慶名出身。琉球大学教

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

育学部技術・家庭科を卒業し、1966年に具志川教育区立高江洲中学校に採用。以後、定年退職する2001年まで技術・家庭科教諭として教鞭をとる。森根氏の誕生日は昭和16年4月1日のため本来は昭和15年生と同学年になるはずだが、手続き不備のため昭和16年生と学生生活を過ごしてきた。しかし、退職にあたっては、昭和15年生と一緒に退職しなければならないことが判明したが、本人の事情もあったため1年早く定年退職している。そして、2003年に沖縄市平和ガイドネットワークに入会。2016年から同ネットワーク共同代表世話人を務めている。

以下、森根氏の戦争体験や戦後の教員生活、平和ガイドの取り組み等についてまとめる。

(1) 戦争体験について

森根氏が暮らす旧与那城村の住民は、戦時中、当時の新垣金造村長の判断で県が疎開先として指定した国頭村と東村には行かず、旧金武村屋嘉に疎開することになる。しかし、そこでも戦時中の食料不足が深刻になってきたため、森根家は屋慶名に戻ってきている。森根氏は、戦時中の避難生活について次のように語った。

「戦時中、避難したのは藪地島のジャーネーガマです。屋慶名の人ほとんどが藪地に逃げました。ジャーネーガマには“急二階”というのがあって、二階建てというより、大きなガマがあってその上に入れるガマがまたありました。ガマの周辺の土地は僕ら森根家の土地だったので、権限があったのか分かりませんが、一番安全な場所だということでその二階に僕らは入っていました。また、その時は、橋はないので屋慶名の展望台の一番端っこの藪地に近い場所から山原船で渡り、向こうに船を隠しました。米軍は5時までは決まって引き上げるので、夜は安心しました。ただ、4才位まではほとんど記憶がありません。ガマに入っていた事を体が少し覚えています、兄さんや姉さん達がこうだったんだよって教えてくれました。4才過ぎたら覚えていて、終戦直後の事は案外覚えています。」



写真1 藪地島（うるま市与那城）

森根氏の父親は長男だったため、森根家を途絶えさせないように徴兵忌避を行う。沖縄県内では自分の体をわざと傷つけたり、海外への移民、故意に罪を犯して兵役をのがれる忌避事件等がみられた。

「僕の親父は徴兵逃れをするために、ンムヌカシ（芋のカス）ばかりを食べていました。親父は長男だったので、親からは子孫を残さないと言われ、森根家はつぶれると言われて、戦争に行かないためにンムヌカシを食べました。芋のカスを搾って、そこから澱粉をとって食べるのですが、カスだから栄養もなくイモワターみたいになり、病気になって徴兵を逃れました。また、徴兵された親父の弟はパラオで戦死してしまいました。親父は、僕が小学3年生の時に心臓弁膜症で亡くなりますが、その影響だと思えます。37歳でした。」

戦争の影響で父親は早世するが、森根氏の弟や森根氏自身も戦中・戦後の生活の中で大きな病気と怪我を負っている。

「僕の弟はちょうど1才で、ジャーネーガマに入ると泣くもんだから母親は周りから言われていました。沖縄戦では、小さい子どもの口を押えて窒息死させるという話もありますが、母親はすぐ近くの大きな岩の辺りで過ごしました。しかし、弟はそこで皮膚病を患ってしまい、長い間治らないので小学校までからかわれました。僕が小さい時は、弟が悪いとしか考えていませ

んでしたが、大きくなり弟に対し「すまなかった」という気持ちになりました。こういった事も、戦争のひとつの悲惨さだと思います。戦後、僕は前原収容所に入りますが、そこで僕は手を折りました。かけっこをしている時に押されて骨折しました。あの時は、医者はいないので米軍がソーミン箱のような板切れで固定したんだけど、きれいに継いでいなくて、寒くなると神経に痺れが残りました。教員になってから中部病院で神経を移動させましたが、今でもって厄介です。」

戦争が終結しても、ほとんどの人が心や体に大きな傷を負ったままで、その後遺症は一生消えてなくなるものではない。

(2) 学生生活と教員生活について

戦後の学校教育は「青空教室」という文字通り、校舎もない状況で再開されました。校舎はもちろんのこと、教科書や教具、学用品もなくゼロからの出発だった。森根氏が在籍した前原高等学校は、旧具志川村高江洲（現在のうるま市立高江洲中学校の校地）、旧与那城村西原（現在のうるま市立与勝中学校の校地）、旧具志川村田場（現在地）と校舎を移転しており、その度に地域や保護者、生徒の力を借りながら校舎建設が進められた。森根氏が入学した頃は現在地に移転したばかりで校舎の整備にあたったという。

「僕らの頃は移転工事で、僕の一期先輩から作業が多く、勉強どころではなかったんです。祖慶剛という測量の免許をもっている校長がいましたが、僕もまた測量が好きで、また数学も好きだったので、校長に呼ばれてポールを持ちたりして測量しました。時間があったら、「あんたも手伝いなさい」と呼びに来ていました。校長によべられたら、みんなハイハイして手伝っていました。」

高校卒業後は、琉球大学教育学部で教員免許を取得し、技術・家庭科の教諭として教鞭をとる。教員生活をスタートさせた1960年代半ばは日本政府に

よる義務教育諸学校への教科書無償配布が始まったばかりの時期で、本土の学習指導要領に準拠した学習指導が行われていた。学校における平和教育に関しては、「慰霊の日」を中心にした取り組みが主だったようである。

「僕は職場の民主化というのがあってそれに関わったり、平和分会の係をしたりしてました。赴任した学校ではできるだけ平和教育はやってきましたが、あの時は沖縄の戦跡等が分からないので、本を読んで勉強しました。教える人も誰もいませんでした。なので、本当の沖縄の惨状というのは分かりませんでした。虐殺があった等とか。そのため、語り部の宮城喜久子先生達から聞いて勉強しました。沖縄戦が大変悲惨な状況だったという事は、退職して宮城喜久子先生達から勉強しました。当時は、戦争を体験した教員もいましたが、学校で語ることはほとんどありませんでした。大田昌秀先生みたいに鉄血勤皇隊について語る人もいなかったと思います。大田先生も最初からこういう証言はやっていなかったと思います。ただ、1989年にひめゆり平和祈念資料館がつくられ、この人達が語り始めて、次第に平和教育も活発になってきたという感じがします。ただ、僕が中学生の頃までは、友だち同士が集まったらこういう飛行士になるとか特攻隊って格好いいねって話していました。終戦直後もこんな感じだったんです。」

1952（昭和27）年に沖縄教育連合会が改組し、沖縄教職員会が設立された。戦後の教育復興や復帰・反戦平和運動、教職員の組手的活動を推進し、特に復帰運動に関しては沖縄県祖国復帰協議会の一翼を担った。1972年5月15日の復帰の日、式典で屋良朝苗県知事が挨拶の中で、「沖縄県民のこれまでの要望と心情に照らして復帰の内容をみますと、必ずしも私どもの切なる願望が入れられたとはいえない」と述べたように、広大な米軍基地が残されたままの復帰となった。復帰の日、県内のほとんどの学校では日本政府が準備した復帰記念メダルが、教職員組合の意向等により配布されなかった。

「復帰の年は高江洲中学校勤務の最後の年でした。僕は組合には入りましたが、組合活動にはあまり関心がありませんでした。結婚もして、生徒と遊んだり教材を作ったりするのが、僕の生き方のひとつでした。教材作りで県から表彰を受けたこともあります。復帰の頃は、各学級担任に「売って下さい」という事で国旗が配られました。ところが、分会長からは「これは問題だよ」と言われたので、買いたい人はお家で買って下さいと生徒に話したと思います。分会がこれはダメという事で、ストップがかかったと思います。また、復帰の日には学校の前を五・一五行進団が通りました。行進団が来ると、分会の組合員から激励して下さいと連絡が入ったので、授業中でしたがみんな外に出て行って拍手をしました。復帰運動もすごく、与儀公園では何回もありました。あの頃の動員は、ほとんどの人が参加していました。欠席はしかなかったと思います。組合員でないのが不思議なくらい、みんなが入っていました。みんなが行くから楽しかったです。おにぎりも配られて。復帰運動の集会に行くうちに、次第に意識がめばえてきました。」

(3) 平和ガイドの取り組みについて

現役の頃から平和教育の取り組みを進めていた森根氏は、後述の照屋盛行氏の薦めや退職教員として社会の中で何かできることはないかという想いで平和ガイドを始めた。また、1970年代にかけての旧与那城村平安座・宮城島周辺の石油備蓄基地（CTS）建設に伴う埋め立て事業に反対する住民運動に関わったことも影響している。

「僕はCTS闘争という住民運動があって、安里清信先生を支えました。このお家も運動の協力者がブロック積みをやってくれました。ここには運動を妨害する人達がきたので、5m位の鉄棒を使ってネットを張ってありました。今はもうみんな切り取っていますが、高く塀しているのは、そういう事なんです。そして、酸素ボンベ。妨害する人達が来たらそれを叩いて、火事だ火事だあって使っていました。」

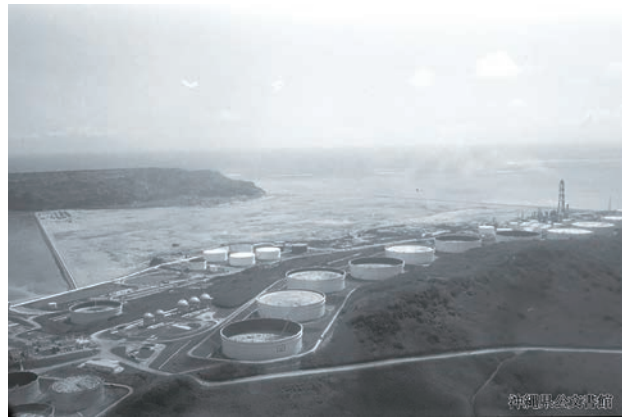


写真2 1976年の平安座島「沖縄県公文書館所蔵」



写真3 森根氏の自宅のボンベ

教職を退職した後も沖縄県退職教職員会の中頭の理事として積極的に研修に参加したりして、平和教育の重要性を常に心に感じてきたことが、平和ガイドの原動力になっている。

学校の児童・生徒を対象にフィールドワークや講話を実施するにあたっては、何をどのように伝えるかという事を重視しており、

「沖縄戦は、あくまでも15年戦争の中の沖縄戦という位置づけです。また、沖縄が今なぜこのような状況にあるのかという現実問題にふれます。戦後、占領されて、これが79年も続いています。この前、埼玉の高校生を相手に授業を

しましたが、発展している今の北谷という印象だけでは困るわけなんです。北谷を含む本島中部の西海岸から18万3千人の米軍が上陸し、ここを境に米軍が南北へと分かれて進軍し、占領を加速させていった。こういう場所であったということも授業するのです。また、基地がある時は3億円位の経済効果だったものが、今はもう300億円以上あります。こういう事を知らせないといけません。なので、平和教育というのは、ただ戦争を語ればいいというものではなくて、現実問題も取り上げます。」

とあるように、沖縄戦そのものだけでなく、戦争にいたる背景や戦争が及ぼす影響等を語っていた。また、ロシアとウクライナ、パレスチナとイスラエルの間で戦闘が展開されている状況を踏まえ、沖縄戦はどうだったのかを考えることが重要だと述べている。

「沖縄戦がどうだったかという、似たようなことが起きています。本当に残虐な。今は、虐殺、ジェノサイドというようなやり方でやっています。怖い。」

かつて、ドイツのリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー元大統領が、第二次世界大戦終戦40年を記念する演説で「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目になる。」という有名なスピーチを行ったが、悲惨な戦争を再び起こさない、起こさせないために沖縄戦の教訓を学ぶことが重要である。

最後に、平和ガイドの現状について次のように語り、沖縄市平和ガイドネットワークの活動の重点を示した。

「僕らは沖縄の先生方や子ども達を中心にガイドをしています。まずは、沖縄の子ども達にしっかりとということで。でも、沖縄市平和ガイドネットワークはほとんどが75歳以上でガマに降りて行ってという事は体力的に非常に難しい状況になっています。若い会員も4・5名程はいますが。僕はまだ大丈夫ですが、それでも多くはできません。」

一人でも多くの人に沖縄戦の実相を伝え平和な社会を築くために、平和ガイドに携わっている方々は日々活動している。しかし、ガイドの方の活動範囲が次第に限定されていく現状をふまえ、今後は学校の教職員研修の支援にも力を入れたいとの事だった。現役の教職員は当然のことながら戦争を体験していない。もちろん、それは教職員に限ったことでもなく、沖縄県の人口の約93%が戦後生まれの状況（「令和5年度沖縄県住民基本台帳年齢別人口」参考）となっている。戦争体験をいかに継承していくかは、社会全体で考えなければならない課題だと感じる。

3. 照屋盛行氏の証言

照屋氏は旧北谷村字東出身。琉球大学を卒業し、1964年に与那城教育区立宮城中学校に採用。以後、定年退職する2001年まで数学科教諭として教鞭をとる。2001年に沖縄市平和ガイドネットワークに入会。2003年から同ネットワーク共同代表世話人、2017年からは顧問を務めている。

以下、照屋氏の戦争体験、復帰運動や平和ガイドの取り組み等についてまとめる。

(1) 戦争体験について

戦時中、照屋氏の家族は旧羽地村に避難する。比謝橋から馬車に乗って羽地に向かうが、名護曲がりのあたりでは道の側で座っている老人をよく見かけたという。おそらく、老人の子ども達が「後から迎えにくるよといって置き去りにされていたのではないか」との事だった。また、照屋氏の父親は昭和12年の日中戦争で中国に派兵され、沖縄戦の前には復員して沖縄に戻っている。戦争のことについてはほとんど語らなかったそうであるが、「ヤマトウヌヘイハデージドォ」と話していたことを覚えており、中国に侵攻した日本軍の行為を指していたと考えられるとの事だった。

米軍が本島北部を占領すると、旧羽地村の田井等地区に収容所が設置され、照屋氏の家族もそこで生活するようになる。沖縄本島内には12の民間人収容地区が米軍によって設置され、その中でも田井等地区は最大規模の収容所であった。『名護市史本編3 名護・やんばるの沖縄戦』によると、1945年8

月31日時点で88,970名を収容し、中南部からの避難民もいた。

「羽地のターブックワー（水田）のあたりに振慶名という字があって、今は小学校があります。また、北谷村民が割り当てられた場所があり、夜は豚小屋にススキなどを敷いて寝床にしていたことを覚えています。」



写真4 旧羽地村田井等「沖縄県公文書館所蔵」

また、羽地は沖縄本島南部と比べ激しい戦闘は行われなかったが、ターブックワーに銃を構えたまま顔を突っ込んで死んでいる兵士の姿が記憶にあるという。

収容所を離れた後も、故郷である旧北谷村字東が米軍嘉手納飛行場として接收されたため立ち入ることも許されず、現在の沖縄市嘉間良で生活することになった。



写真5 1945年5月頃の嘉手納飛行場
「沖縄県公文書館所蔵」

当時の家屋はほとんどが茅葺きで台風の度に吹き飛ばされていた。嘉間良で生活を始めた頃の体験として、

「戦争が終わったばかり時期だったので、私の家の前の道を、髪をバサバサにし、何か白いものを着て、夜中いつもブツブツ言いながら通っていく女性がいました。「どうして毎晩何か言いながら行くんだろう」っておふくろに聞いたら、「あれはね、息子が戦争で死んで気が狂って、位牌を持って毎晩ここを通るんだよ」と言っていました。」

と話した。沖縄戦では20万人以上の尊い命が犠牲となったが、生き残った人々の苦労や悲しみは非常に大きかった。親が子をなくす気持ち、子が親をなくす気持ち、残された人々の嘆き悲しみは重いものだった。

（2）復帰運動について

1952（昭和27）年4月28日サンフランシスコ講和条約が発効し、同条約第3条に基づき米国が沖縄を引き続き統治することになる。沖縄では、対日講和会議によって沖縄の帰属問題の方針が打ち出された頃から日本復帰を求める声が現れるようになった。1951年の日本復帰促進期成会、1953年の沖縄諸島祖国復帰期成会と続き、1960年には多くの団体が参加し沖縄県祖国復帰協議会が設立された。照屋氏が教員生活をスタートさせた1964年は復帰運動が活発に行われた時期だった。

「私自身がそうでしたが、祖国復帰運動の頃、一生懸命黒板に「君が代」を板書して、「これが祖国の歌だよ」って言って教えていました。今振り返ってみると、本当にある意味で大変だということをしていました。あの時は、担任が「日の丸」の旗を生徒に紹介して、買わせていました。各家庭に、「正月にこれを掲げるんだよ！」と、とくとくと説得しました。親にも買うように呼びかけていました。学校内では校長の下に教諭職があり、組合では分会の下に分会長がいました。そして、校長が分会長を兼

ねていました。動員の場合も校長が先生方に呼びかけて、「はい、この学校は何名ね」って報告していました。このような位置づけなので、活動自体も当然盛り上がるわけです。」

照屋氏は沖縄教職員会に所属し、復帰運動に関わるようになります。

「沖縄の祖国復帰運動を訴えに各県に行くことがありました。当時は、那覇丸という船を復帰協がチャーターして、各県に沖縄の祖国復帰運動を訴えに行っていました。これに、沖縄教職員会は参加していたのですが、私はコザ市の青年部長だったため、「あなたも行きなさい。」ということになって参加しました。当時は飛行機がないので、船で東京の晴海港に行きました。そして、晴海港から全国各地に派遣されるので、逆に全国各地からも私たちを引き取りにくる人達が集まっていました。「どこどこに行く人は、どこどこに集まってください。」という具合に、振り分けられて各地に派遣されました。私は石川県の能登半島に割り当てられました。28歳の頃だったと思います。そこで、生徒や先生方に向かって沖縄の実情や復帰運動について訴えるわけです。今考えたら大変なことをしていたんだなと思います。祖国とは何なのか、祖国はどうあるべきだということが、今考えたら祖国復帰運動とかもよく分かるはずもなかったと思います。」

沖縄が復帰運動で繰り返し求めてきた“即時・無条件・全面返還”が叶わず、広大な米軍基地を残したままの復帰になってしまったことに対し、これまで復帰運動を展開してきた人々の中には戸惑いを隠せない人もいた。

(3) 平和ガイドの取り組みについて

照屋氏は沖縄市平和ガイドネットワークが設立された早い時期から入会し、同ネットワークの共同代表世話人として精力的に活動してきた。その根底にあるのは、やはり戦争体験の風化が進むことに対する危惧だった。

「2001年に学校を定年退職し、沖縄市平和ガイドネットワークに入りました。私は戦前世代ですから、戦争のことがいつも念頭にあって、現役の頃からいろいろと勉強をしていました。学校の職員研修ではガイドに来てもらい、6・23の前に先生方を集めて勉強会を行い、そして授業をやるというような感じでした。私がガイドの必要性を感じたのは、全国の学校現場で戦争体験者がいなくなるからです。これは容易なことではないと、自分が定年になりハッと気づきました。そこで覚悟を決めて、ガイドに飛び込んでいきました。幸いにも、飛び込んでいったら、みんなが歓迎してくれました。特に、ひめゆり平和祈念資料館で副館長を務めた宮城喜久子さんに相談に行ったら、「ターガナムル ウチナーンチュナラ ターガルナインサ（誰でもできるよ。沖縄の人ならだれでもできるよ。）」と気軽に言って背中を押してくれました。これで安心して入るのですが、未来のワラパー（子ども）達にはいい加減なことは言えないので宮城さんにはいっぱい勉強させてもらいました。また、印象的なこととして、宮城さんが北谷町内の小学校で講演をしていた時に、後ろで話を聞いていた保護者がバツと宮城さんの方に走って行って、「先生は、私たちに何も話してくれなかったんだよね。先生。」って、「先生でも、この歳になるまで口をわっちは話しきることができなかつたんだね。」って、泣き出してうたえていました。それを見て、私は戦争体験者というのは本当に身を切られるような思いで語っているということを実感して、またいろいろと勉強した方がいいと考えるようになりました。」

沖縄県内では平和ガイドを実施する団体として1994年の沖縄平和ネットワーク、1997年の沖縄県観光ボランティアガイド友の会など多くの団体が設立されている。県内の児童・生徒や一般はもちろんのこと、県外からも多くの修学旅行の受け入れ、平和教育や沖縄の自然・歴史・文化等を発信する役割を担っている。

「大田昌秀県政の時代ですが、1997年に沖縄県観光ボランティアガイド友の会が設立され、また、各市町村でもこのような平和ガイドの組織がつくられるようになりました。ところが、時代が経るにしたがって、どんどん消えていき、結局、このような平和ガイドとして団体の活動が続いている市町村は沖縄市だけとなりました。私が沖縄市平和ガイドネットワークに入った当初は色々な職業の方がいて、学校関係では私が初めてでした。それから学校関係の人達が増えていき、会員は20～30名くらいで推移しています。学校を退職した人が多く、現役の教員も2～3名います。もちろん、教員以外の人もあります。沖縄市だけが続けているのも、学校関係の人達が多くなって平和教育の重要性や意味を分かっているということが理由に挙げられると思います。」

平和教育は学校教育のみならず、社会教育またはあらゆる場において重要である。社会全体で沖縄戦の教訓と平和の尊さの理念を後世に正しく継承していく事は重要である。照屋氏は、最後に戦争体験の継承について次のように述べた。

「戦争体験の証言が沖縄では多い。そのため、証言の活用が重要になると思っています。幸い、沖縄の場合は県史など沢山残されています。心があれば、読めば十分です。それも、我が身としてです。知識とかそういう意味ではなく、戦争の実態を知ろうという気さえあればです。迷った場合は証言に帰れということです。証言は古いものほど実感がこもっています。証言には言葉ではなかなか言えない部分もちゃんと書かれています。」

4. おわりに

戦争体験者の減少に伴い、如何にしたら戦争を語り継ぐことができるのか考える必要がある。照屋氏も話していたように、沖縄県では多くの戦争体験が証言として語られ、沖縄県史や各市町村史等に残されてきた。また、旧真和志村の住民によって戦後最も早い時期に建てられた魂魄の塔を初めとする多く

の慰霊碑(塔)の他、住民が避難したガマや日本軍の陣地跡等の戦争遺跡がある。遺跡には相当しないが、忠魂碑や奉安殿といった戦争に関連した構造物や収容所跡等もある。戦争遺跡等に関しては、沖縄県埋蔵文化財センターが『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査』(I)～(VI)等で詳細にまとめ、沖縄戦研究等に役立てられている。戦争体験を直に聞くことが困難になってきている今日、これらを活用することが一層求められてくる。

これまで、多くの方々の尽力により沖縄県に関する膨大な証言が記録されてきたが、戦争体験を語る活動そのものの記録はあまり行われていなかったのではないと思われる。「戦争体験を風化させてはならない」、この事を考えると沖縄戦を語る活動の記録も今後は残しておく必要があると考える。

参考文献

- 沖縄県教育委員会『沖縄県史 各論編 第七巻 現代』2022年
- 名護市史編さん委員会『名護市史 本編3 名護・やんばるの沖縄戦』2016年
- うるま市具志川市史編さん委員会『具志川市史 第六巻 教育編』2006年
- 沖縄市役所総務部秘書広報課『広報おきなわ No. 324』2001年

